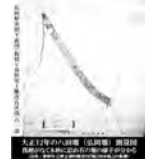
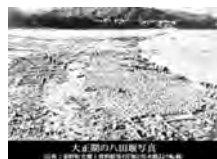


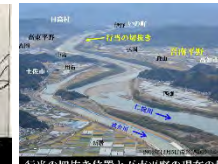
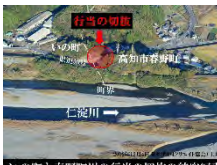
高知県の渇水・利水に関する防災風土資源

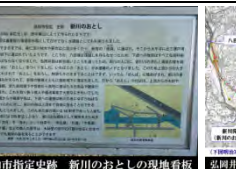
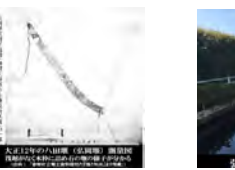
整理番号	高渇 1	扇の要であった山田堰跡							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県香美市土佐山田町山田島								
見所・アクセス	土佐山田町の物部川には、高知県最大穀倉地帯の香長平野を潤してきた山田堰がありました。 現在、山田堰史跡として高水敷に一部保存されています。国道 195 号の物部川架かる香我美橋の手前の道路を約 500m 進むと物部川の堤防に出ます。そこから山田堰史跡には歩いて行けます。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4  写真 5								
	 写真 6  写真 7  写真 8  写真 9								
解説文	四国の川との関わりで、とりわけ大きい功績を残したのは、野中兼山です。兼山は、元和元年(1615)姫路で生まれ、4歳で土佐に移り、土佐藩家老野中家を継いだ。17歳で奉行職について以来30年以上もの間、土木、港湾、山林行政や地場産業の育成などに奔走しました。特に、物部川での新田開発は、土佐の発展に大きく寄与しています。 物部川は河床が低く、流域には、写真1のように灌漑の難しい河岸段丘が広がっています。兼山はこうした荒れ地を灌漑するために、物部川の扇状地が広がる扇の要の場所に大規模な堰を築いて、縦横に用水路を建設しました。 25年の歳月をかけて長さ327m、幅11m、高さ1.5mの山田堰を建設し、同時に右岸側に上井（かみゆ）、中井（なかゆ）、下井（しもゆ）（写真2）、左岸側に父養寺井（ぶようじゆ）の用水（写真3）を導き、1700町歩もの広大な新田を開発しました。これが、現在、高知県最大の穀倉地帯になって香長平野（写真4）を潤してきましたが、昭和48年、上流に合同堰が完成してお役御免となり、現在は史跡（写真5）として一部が高水敷に写真6のように保存されています。写真7は、山田堰堀川三百年史の付図にある明治後期における山田堰の改修平面図です。 また下井（しもゆ）は、舟入川となって、写真8のように高知の国分川まで流れ、江戸時代の重要な舟運としての役割を果たしました。野中兼山は、現在でも土佐を作った男として有名で、その銅像が、大豊町本山の婦全山公園に写真9のように建立されています。								
得られる教訓	野中兼山という先人の努力により、造られた山田堰により、物部川の下流域（現在の香長平野）が発展したことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

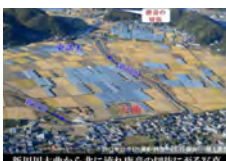
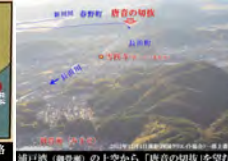
整理番号	高渇 2	現役の八田堰							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県吾川郡いの町八田								
見所・アクセス	いの町八田には八田堰があります。この堰は、土佐藩の家老、野中兼山によって、慶安元年（1648）に造られた歴史が古い堰です。 八田堰は、仁淀川の河口から9kmほど遡った場所、県道36号の堤防から見えます。								
写真・図	 八田堰 写真 1  仁淀川河口から9km付近にある八田堰 写真 2  兼山が造った仁淀川の鎌田堰跡 写真 3  兼山が整備した堰、用水、堤防 写真 4  野中山公園の工事図面をもつ野中兼山銅像 写真 5  現在も斜め曲線形の形状が残る八田堰 写真 6  川に綱を渡る糸流し工法の絵図 写真 7  八田堰建設の絵図 写真 8  大正12年の八田堰写真 写真 9  大正期の八田堰写真 写真 10								
解説文	仁淀川の河口から9kmほど遡った場所に八田堰（はたぜき）（写真1）があります。 仁淀川の流れを遮る最初の構造物となっています。この堰は、土佐を作った男、土佐藩の家老、野中兼山（1615～1664）によって、慶安元年（1648）に造られた歴史が古い堰です。 兼山は17歳で奉行職について以来30年以上もの間、土木、港湾、山林行政や地場産業の育成などに奔走しました。特に、物部川や仁淀川での新田開発は、土佐の発展に大きく寄与しています。 兼山は仁淀川でも堰（八田堰（写真2）、鎌田堰（写真3））を築き流域一帯に新田を開発しました。最大の堰は延長415m、幅25mの八田堰で、5年がかりの難工事で完成させました。ここで堰止められた水は、左岸の「弘岡用水」に落とされ、弘岡平野の荒廃した1253町歩を水田化し潤し、今では施設園芸が盛んな高知市春野町一帯の農業基盤を形成しています。 この用水路（写真4）は伊野と春野の町境に立ちふさがり行当（ゆきとう）の崖を削って造られ、新川の集落を抜けると、元春野町役場、唐音の切抜の水門、第34番札所種間寺の横を流れ、高知市に入ると第33番札所雪隠寺のそばを通過して浦戸湾に注いでいます。水路は川舟の往来にも使われ、”運河”の役割も果たしていました。古い町並みが残る新川の集落は、物資の集散地として大きくなったと言われています。兼山は重労働の治水工事に、長宗我部の遺臣たちを起用しました。藩の兵農分離策で農民になっていた彼らは郷土にとりたてられると不満をやわらげ、先頭にたって新田開発に活躍しました。 このあたりに兼山の手腕が光りますが、あまりに厳しい施策に非難の声が高まり、寛文3年（1663）権力の座を追われ失職、3か月後に急死する不遇の生涯を終えました。遺族も40年も幽閉される悲劇を生んでいます。兼山の銅像（写真5）は、所領していた大豊町本山の帰全山公園に工事図面を手にして立っています。現在、八田堰（写真6）はコンクリートにより近代的に改修されていますが、兼山遺構の八田堰は湾曲斜め堰で、施工にあたっては流水との調和を図るため川に綱を張り（写真7）、流水による綱のたわみぐあいを調べて堰の方向や形状を決めたといわれています（写真8）。大正12年の八田堰（弘岡堰）測量図（写真9）や大正期の八田堰写真（写真10）のように川筋の右岸から左岸にかけて斜めに横切る「斜め堰」という特徴をも併せてもち、「曲線斜め堰」と呼ばれています。 兼山の堰の工事技術として見逃せないのは「糸流し工法」です。高知県内の兼山の築いた堰には、物部川の山田堰、後川の麻生堰、松田川の河戸堰など縄がたわんだような「曲線斜め堰」が多い事実です。								
得られる教訓	八田堰は今も立派に機能して、吾南平野の用水供給の要として、一方で曲線斜め堰として仁淀川の風景に馴染んでいるとともに、現在の高知県高知市春野町の発展の礎となっていることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

整理番号	高渇 3	「念仏堰」							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県幡多郡黒潮町加持								
見所・アクセス	高知県黒潮町加持川には、大渇水でも不思議に堰の水が涸れることがなかったと言われる堰がありました。念仏堰と呼ばれている堰で土佐くろしお鉄道土佐入野駅より北へ直線距離約 2km の県道 336 号線沿いの三嶋神社の前の加持川にあります。								
写真・図									
	写真 1			写真 2			写真 3		
解説文	高知県黒潮町加持川には、大早魃でも不思議に堰の水が涸れることがなかったと言われる堰がありました。念仏堰と呼ばれている堰(写真 2)で土佐くろしお鉄道土佐入野駅より北へ直線距離約 2km の三嶋神社の前の加持川の写真 1 にあります。								
	その名前の由来に関して、四国防災八十八話では、「昔、高知県黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。村の人々は堰が決壊するのは祟りのためで、人柱を立てて祈祷することにより堰が守られると考えました。・・・(中略)・・・								
	村人が、昨夜見た夢の中で、神様から遠からずこの辺りを、縦摘の着物を着て、それに横縞の継ぎを当てた人が通る。その者に人柱として立つことを頼むが良い」とのお告げがあったことから、村人は、横縞の継ぎあてをしていた遍路さんの足を止め、事のいきさつを話し、人柱になっていただくことを祈る気持ちで懇願しました。遍路さんは天に向かって祈り始め、しばらく祈ってから急に口を開き、「私は天涯孤独です。この世に生きるだけ生きて来ましたが、もう残りわずかですから、大勢の皆さんのお役に立てることがありましたら、喜んでお引き受けしましょう」と言いました。村人はよろこび、その遍路さんを迎え入れ、丁重におもてなしをするとともに、その夜は涙ながらに別れを惜しんで夜を明かしました。								
	翌日、村人は堰のそばに大きな穴を掘り、遍路さんを入れました。穴からは節を抜いた大きな竹の筒が地上に出ていましたので、竹筒の底からは「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と読経が聞こえ、それに唱和して地上でも「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と竹筒の音が聞こえなくなるまで、三日三晩祈り続けました。こうして堰はできあがり、人柱の霊力により怨霊の怒りは鎮まり、大洪水でも絶対に堰が切れることがなく、大早魃でも不思議に堰の水が涸れることがなくなりました。それ以来誰言うともなく、念仏堰と呼ぶようになりました。」と紹介しています。								
	現在の航空写真(写真 3)に大早魃でも不思議に堰の水が涸れることがなくなった念仏堰の場所を示します。写真 3 のように念仏堰のある加持川は、下流で吹上川に合流し太平洋に流れる川です。								
得られる教訓	珍しい名前の念仏堰、歴史的な施設の由来を学ぶということを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高 4		吉野川最初の分水・甬喜峰疎水記念碑							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	高知県香美市土佐山田町須江									
見所・アクセス	新改川は、高速道路の南国インターから県道 31 号の前田植野線を南国市立久礼田小学校に向かって東に約 2km 進んだ場所に流れています。その新改川に架かる「かみかいだばし」を渡り、約 200m 行った道路の左側に甬喜峰疎水（ほきがみねそすい）記念碑（写真 1、2）が建立されています。									
写真・図										
										
										
解説文	四国 4 県にまたがる吉野川流域(写真 3)の集水面積は 3,750km² あり、四国の約 20%に相当します。流域の降水量は太平洋側の高知県の上流山地部で年間平均降水量が 3000 ミリを超す地域を抱える一方、瀬戸内海側に位置する香川県と愛媛県は、降雨量が少なく、古来より水資源の確保には苦労した地域となっています。この深刻な水不足を抜本的に解決するため、藩政時代の末期から豊富な水量をもつ吉野川の水に期待して、銅山川疏水（安政 2（1855）年）などの幾多の分水構想が描かれてきました。吉野川の利水の歴史はいわば分水の歴史であります。 吉野川の豊富な水量を多目的に、より一層高度に活用しようとして、先覚者たちは地形条件を巧みに利用し、良好なダムサイトを設定することにより、流域変更による落差を利用した発電所を建設してきました。現在は、早明浦ダム(写真 4)を中核とした吉野川総合開発の実施により、吉野川の水は四国 4 県で利用され、その発展に大いに寄与しています。しかし、そこには先人たちの苦労があったことを忘れてはなりません。特に分水問題は、利害相反が明確になり関係者の調整が非常に困難です。 ここでは、吉野川水系のダム・堰・用水・分水図（写真 5）に示す甬喜峰疎水（ほきがみねそすい）（穴内川分水）について紹介します。									
	吉野川の分水が最初に実現したのは、かんがい用水として吉野川支川穴内川（あなないがわ）から高知県の新改川への導水した甬喜峰疎水（穴内川分水）(写真 6)でした。明治 26 年及び明治 27 年に発生した土佐かんがい史上空前の大干ばつに際して、香長平野（高知平野の東部）は一望枯渇し収穫皆無の状態に陥ります。「明治 27 年の旱害になった際、新改川下流の植田・久次地区が上流に分水を要請したところ上流側が拒否したため、上下流で乱闘になりました。こんなことを続けてはいけないうと甬喜峰疎水の必要性が再び痛感されるようになり、新改村や久礼田村の村長などが協力して、高知県に嘆願した」（土佐山田町史）とあるように、新改川(写真 7)沿いの村で地元農民たちの水争いがあったことや吉野川からの分水の計画を要請したことがわかります。その結果、国分川の他に水源を求め、野中兼山（のなかけんざん）(写真 8)が計画した穴内川から分水する工事の期成運動を推進し、関係各所の協力を得て明治 29 年に疎水工事に着工しました。工事は、現在の香美市土佐山田町繁藤において、穴内川を堰き止めて、甬喜ヶ峰の中腹に延長 988m のトンネルを掘り流域変更し分水するものでした。この甬喜峰疎水（穴内川分水）は明治 33 年に竣工(写真 9)し、その 10 年後の明治 42 年には疎水の落差を利用して吉野川水系で最初の水力発電を行いました。現在も吉野川から分水された水が豊かに流れる新改川の様子(写真 10)は、先覚者の水源整備の歴史を現在も物語っています。									
得られる教訓	皆さんが暮らしている南国市久礼田や香美市土佐山田は、かつて水不足で悩まされました。しかし明治時代の吉野川からの甬喜峰疎水（ほきがみねそすい）（穴内川分水）により、水不足が解消され、今日の南国市、香我美市の発展の礎となりました。このような吉野川の流域外分水の歴史は、先人の労苦によって成り立っていることを教えてください。									
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正		昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで	
									平成以降	

整理番号	高渴 5	行当（ゆきとう）の切抜							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高知市春野町弘岡上								
見所・アクセス	高知県吾川郡いの町から高知市に至る県道 36 号沿いの、いの町と春野町の町境には、行当の切り抜きの兼山遺構碑（写真 1）があります。八田堰（いの町）から左岸の吾南平野に仁淀川の水を供給する「吾南用水」を通すために立ちふさがり行当の崖（岩盤）を断ち割った用水路工事で最も困難であった場所とされ、碑には、土佐藩の執政の野中兼山は吾南平野の灌漑と水運の為掘鑿を計画し慶安元年着工五年後の承応元年完成した。などと記されています。								
写真・図									
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5				
解説文									
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10				
得られる教訓	八田堰（写真 2）で堰止められた水は、堰下流左岸の「吾南用水」に落とされ、吾南平野の荒廃（写真 3）した 1253 町歩を水田化し潤し、今では施設園芸が盛んな高知市春野町一帯（写真 4）の農業基盤を形成しています。この用水路は写真 5 の伊野と春野の町境に立ちふさがり行当の崖を高さ 10m、幅 10m、長さ 40m 削って造られ、写真 6 の図に示すように新川の集落を抜けると、元春野町役場、唐音の切抜の水門、第 34 番札所種間寺の横を流れ、高知市に入ると第 33 番札所雪隠寺のそばを通過して浦戸湾に注いでいます。この工事の中で、最も困難だったと想像されるのが、用水路を通すために山を断ち割った切抜工事です。行当の切抜の規模は、高さ 10m、幅 10m、長さ 40m です。写真 7 の航空写真のように周辺の改良工事によって当時のようすとは大きく変わっていますが、南側の切りたつた岩盤は兼山当時の切抜の一部分と考えられています。当時、土木工事には火薬の使用が禁止されていたため、ノミとツチで岩を割っての作業は大変な難工事であった。その厳しさは「イモジ十連」や「春兎通ったあとが百貫目」、「古屎の皮はぎ」の伝説になっています。高知市春野郷土資料館「兼山の土木事業Ⅱ」の展示資料には、「イモジ十連」のイモジ（写真 8）が展示され「イモジとは里芋の茎を干したもので、別名「ズイキ」ともいい土佐ではこれを食料のひとつとしていた。…中略…用水路の建設工事において山を切り抜く工事がおこなわれていたとき、硬い岩の上でイモジを焼けば砕けやすくなるということを聞いた兼山が、付近の農家へイモジを十連（10 束）ずつ持ってくるように命じました。これ以来、土佐では渋い顔のことを「イモジの十連もかかりたる顔」いうようになった。」また「ある日の作業中、一人の男が近くを走るウサギを見かけました。その男は「ウサギがいた」と言えば多くの人が捕まえにいった作業が止まってしまうと思い黙っていました。ウサギはそのまま離れていってしまいました。休憩中に男が皆にその話をする、人びとはウサギを捕まえられなかったことを悔しがった。しかし、その話を聞いた兼山は男の心がけに感心し、石灰百貫を褒美にとして男に贈った（写真 9 の絵）」さらに「デンネ（伝右衛門＝兼山）様もヒリバリ（大小便）はかまわなかった」といわれるように、工事中でもトイレ休憩は許されていた。現場にはトイレもなかったので、適当な場所で用を足すふりをして休むときには、その辺に転がっている大便の外側をなぞり、新たにしたように見せかけたという。この話は、「工事があまりにもきついたので、借り出された人はわずかな時間も惜しんで労を癒した。」とされ、兼山時代の厳しさを示すエピソードになっています。当時の用水路が現在も写真 10 のように生き続け社会資本の整備は過去から積み上げによって成り立っていることが分かります。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	高渇 6	新川のおとし							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	〒781-0325 高知県高知市春野町森山								
見所・アクセス	国道 56 号の仁淀川に架かる新仁淀川大橋の下流の左岸堤防沿い弘岡用水を約 700m に入った所の新川太子堂から左折し約 200m 行った所に「新川のおとし」(写真 1、2)があります。野中兼山の政策によってつくれた八田堰と弘岡井筋(ひろおかいすじ)は、それまでの春野を一変し、農業のとして発展させる切っ掛けになりました。そしてその用水路と新川川を「新川のおとし」でつなぎ内陸水運路をひらいたことは画期的なことでした。その場所は、弘岡井筋と新川をつなぐ「新川のおとし」場所(写真 3)写真に示します。								
写真・図	 新川のおとしの新川開門を下流から望む  新川のおとしから下流の新川川を望む  弘岡井筋と新川川をつなぐ「新川のおとし」場所  高知市指定史跡 新川のおとしの現地看板  弘岡井筋全図  吾南平野(弘岡井筋)の春野郷土資料館展示模型  新川のおとしと八田堰建設前後の航路  大正 12 年当時の八田堰(弘岡井筋)断面図  弘岡井筋(幹線)の現在の様子  当時の新川のおとしの模型 写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5 写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10								
解説文	現地には高知市指定史跡の新川のおとしの看板(写真 4)に、当時の弘岡井筋と新川川をつなぐ新川のおとしの関係が描いた図が記されています。この看板には、「弘岡井筋は農業面の灌漑用水としてだけでなく、水運路としても利用されたことや、八田堰ができるまでは、奥仁淀の村々の木材や薪炭などは仁淀川を下り、新居の甫湊(仁淀川河口)に運ばれ、そこから太平洋に出て浦戸湾から城下へ運ばれていた」など書かれています。また明治 39 年地図を下図に描かれた弘岡井筋全図(写真 5)には、八田堰から用水が弘岡井筋を通り、新川川を経て唐戸の切抜を抜けて長浜川から浦戸湾へと繋がっていることが分かります。その様子は立体的な吾南平野(弘岡井筋)の春野郷土資料館展示模型(写真 6)でさらによく分かります。八田堰建設前後の航路(写真 7)のように八田堰と弘岡井筋建設以降、上流からの物資は井筋を通り、新川川を経て唐戸の切抜を抜けて長浜川から浦戸湾へと入るようになったことが分かります。 大正 12 年当時の実測平面図(写真 8)でもわかるように、八田堰は、筏越(いかだごし)を作らなかったため下流への物資はすべて弘岡井筋を通らねばなくなりました。 八田堰でせき止めた水を流した弘岡井筋(幹線)(写真 9)は、割合高いところを通ったため、井筋と新川川には高低差があったため、弘岡井筋(幹線)の終点である新川開(写真 5)には、新川川の入口に高低差を調節するための「新川のおとし」がつけられました。 高知市春野郷土資料館展示模型(写真 10)に示すように、上流から運ばれたイカダは「おとし」の上につながれ、ここで解いて「おとし」の上を流して落とす。そのとき、水門によってためられた水が一気に流れ落ちるため、「おとし」の上は激流となり、それは壮観なものであったといわれています。水路はこのようにイカダ流しや川舟の往来にも使われ、「運河」の役割も果たしていました。 古い町並みが残る新川町は、「おとし」を中心としてつくられた在郷町です。上流からの筏はここで解体され、さまざまな物資は一度陸揚げされて新川舟形衆の舟に積みかえられ、城下に運ばれました。新川は仁淀川上流と城下町の中継地として、上流からの木材や木炭・雑穀、また城下などから運ばれる日用品や雑貨が集まり、それらを取り扱う運漕業者や商人の町として大きくなり、幕末には約 200 軒の町並みとなりました。								
得られる教訓	藩政時代の大事業であった吾南(弘岡)用水路建設とともに、仁淀川旧分流を整備して、弘岡井筋と新川のおとしで接続させ、こうしてできた新川川をさらに分けて、一方は唐音の切抜を抜けて浦戸湾へと通じ、水運路としても大いに利用され土佐藩を発展させる切っ掛けになりました。この内陸水路の要となった「新川のおとし」の兼山の着想、土木技術に学ぶということを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	高渇 7		唐音（からと）の切抜						
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	〒781-0315 高知県高知市春野町東諸木								
見所・アクセス	春野町の東端部の東諸木と長浜町との境目に、海岸部から始まり内の谷まで延びるごく低い山地があります。その途中を切り抜いたのが「唐音（からと）の切抜」です。その場所は、東諸木から長浜町に抜ける県道 278 号弘岡下種崎線沿いの春野町と長浜町の町境（写真 1）に、唐音（からと）の切抜の兼山遺構の碑（写真 2）があります。								
写真・図									
	写真 1		写真 2		写真 3		写真 4		写真 5
写真・図									
	写真 6		写真 7		写真 8		写真 9		写真 10
解説文	この春野町教育委員会、昭和 63 年 3 月建之の碑文には、「野中兼山は吾南平野の灌漑と水運のため弘岡用水と新川川の水路の開発に 1648（慶安元）年より 5 年の歳月を費やして完成した。唐音の切抜は新川川と浦戸湾を結ぶ水路として開発されたもので長さ 50 間（90m）高さ 15 間 5 尺（27m）幅 7 間（12m）に及ぶ大工事であった。この切抜の開通により仁淀川流域と高知城下町とが内陸水路によって結ばれ産業は発展した。兼山苦心の遺跡である。」とされています。 また、堰と用水路（春野町立郷土資料館）資料には、明治 39 年地図の下図に弘岡井筋全図（写真 3）や内陸水路やそれ以前のルートが描かれた写真 4 があり、「仁淀川上流の木材や物資は、仁淀川河口の新居村甫渚をへて、外海から城下へ運んでいましたが、冬や海の荒れるときは命がけの仕事でした。八田堰がつくられてからは、上流からの物資は弘岡井筋から、新川川を通過して浦戸湾へ入るようにより、安全な航路が確保されました。兼山は新川川と同様に、山田堰に連なる舟入川をつくり、物部川上流と城下町も結びました。こうして城下町を中心として水運路が整備され、土佐藩の流通体制が強化されました。」あります。また余った用水や水田で使用された排水は、すべて用水路や河川を通じて新川川へ流れ込みます。また雨が降って河川が増水した場合は、それらに水は新川川へ流れ込むように河川は整備されています。つまり、新川川は用水路や河川の受け皿となって、不要な水を海へと流す排水路でもありました。さらに写真 5 のように新川川を分けて一方を唐音の切抜を通じて浦戸湾へと通したおかげで、甲殿の河口が土砂でふさがれることが防がれ、平野部を水がスムーズに流れるようになり、流れてくる排水のおかげで新川川の水量は多くなり、水運としても大いになりました。春野町を流れ下った新川川 は、写真 5 の新川川分岐点から、写真 6 の大曲といわれる東諸木付近は、海岸の波で打ち寄せられた微高地の浜堤の裏側の低平地にあり、この場所から北方に流れ、「唐音の切抜」（写真 7）に至ります。写真 8 のように、ここで新川川から長浜川と川の名前が変わり、長浜の集落を通り浦戸湾に注いでいます。浦戸湾（御畳瀬）の上空から東側の低い山地を切り抜いた「唐音の切抜」を望む航空写真 9 から、春野町の新川川から切抜の水門を流れ、長浜町に入ると第 33 番札所雪隠寺のそばを通過して浦戸湾に注いでいる様子が分かります。こうした兼山の土木工事（写真 10）は、現在、堤防とともに吾南平野を水害から守り、安定した生活を春野にもたらし、今では施設園芸が盛んな高知市春野町一帯の農業基盤を形成し地域は発展しています。								
得られる教訓	吾南（弘岡）の荒蕪の地を開墾し新田を開墾する目的で作られた八田堰、弘岡井筋、行当の切抜、新川おとし、唐音の切抜の兼山時代の普請は、今日の社会資本整備の礎になっていることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	高渇 8	鎌田堰跡の石碑							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	781-2127 高知県吾川郡いの町鎌田								
見所・アクセス	JR の仁淀川鉄橋を西に渡った仁淀川右岸の堤防の上に鎌田堰の跡の石碑（ 写真 1 ）があります。この場所に車で行くには、高知西バイパスの現在の終点の鎌田 IC を出た交差点を右折し県道 39 号線を約 350m 走行した仁淀川堤防に突き当たった所の左側に堤防天端に上がる狭い坂路があります。これを上りに堤防天端を約 500m 上流に入った仁淀川鉄橋まで行ってください。そこに鎌田堰跡の石碑があります。								
写真・図									
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5				
写真・図									
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10				
解説文	石碑の表側（仁淀川側）（写真 2）に「堰址」と刻まれ、裏側には（写真 3）碑の文字も読みにくくなっていますが、わずかに「承応三年兼山先生四年六ケ〇〇萬治二年竣工、長約三二百間、巾約〇十間、昭和十二年改良工事〇〇、昭和十七年夏鎌田〇〇通水利組共建之」の刻字が読み取れます。 鎌田堰は、野中兼山が仁淀川右岸の高東平野（写真 4）を灌漑するため、八田堰に続いて 2.5 km 上流に万治 2 年（1659）に構築したものです。この堰は、長さ 300 間（545m）・幅 10 間（18.1m）、高さ 7 間（12.7m）におよぶ堰であったといわれています。筏越しを設けなかった下流の八田堰と異なり、鎌田（右岸）に近いところに“水越し”を設け、ここを通過する舟筏で賑わい「鎌田堰の筏越し」として名高かったです。 しかし、この堰の竣工により上流の溺谷地形の支川日下川流域の日高村（写真 5）では、ただでさえ浸水被害を受けてきた上に、鎌田堰の仁淀川の河床を年々持ち上げによる水位上昇が加わり仁淀川の逆流がさらに増大しました。このため日下川流域の日高村の農民はひたすら兼山を憎んだといわれています。 堰は、碑の刻字によると承応 3 年（1654）着工し、4 年 6 か月後の万治 2 年（1659）竣工しており八田堰関係は 6 年を要しているのに対し、鎌田堰は少し短い工期で完成しています。工事中兼山は、「毎日高岡から柿色の立付袴をはき、腰に焼きめしをつけ、従者を一人連れ、馬に乗って現場に出向き工事を督励した。」といわれ堰の工事の短縮をはかりました。しかし、鎌田井筋全部が完全に仕上がったのは、このあと約 20 年かかっています。その後、約 300 年に近い年月利用されて来た鎌田堰は、昭和 12（1937）年に至って、高岡町外四ヶ村の耕地整理組合が高岡郡日高村下分に水門を設けてトンネルを掘り抜き、堰を設けない落差による自然流水の方法に改築したため、昭和 17（1942）年に取り除かれました。これにより兼山に憎み続けてきた日下川流域の農民にとって、長く尾を引いた宿怨は、ようやく解消されました。 一方で取水口を上流に移したため、用水路の集水域の増大（写真 6）により、豪雨時などに上流のいの町から鎌田用水路へ排水される量が大きくなるため、土佐市といの町境界付近に仁淀川へ放流できる余水吐（写真 7）を設けて上流から用水を通じて土佐市に洪水が流れ込まない工夫がなされています。 現在は、川内小学校の東と仁淀川堤防の間に大きく掘削された鎌田井筋の跡（写真 8）が残っているのみで、これがただ一つの「鎌田堰の跡」を偲ぶ、渇水・利水に関する防災風土資源となっています。 昔の鎌田堰は見えなくなりましたが、鎌田井筋は、23 km 弱（5 里 24 町 32 間）に及び、荒地地であった仁淀川・波介川流域の干ばつ地帯（高東平野）（写真 9）は、豊かな田畑に変わりました。そして仁淀川の水が市内の水路を流れる景観（写真 10）は、水郷土佐市の大切な財産となっています。								
得られる教訓	仁淀川右岸の高東平野（土佐市）を灌漑するためにつくられた鎌田堰、鎌田井筋の兼山時代の普請は、現在の豊かな田畑の礎になって、用水路は水郷土佐市の大切な社会資本となっています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			